

聖霊による長老の任命とはどのような意味でしょうか

長老が聖霊によって任命されているということは、仮にそれに従わないなら「聖霊に言い逆らう者」(マタイ 12:32) となってしまうということでしょうか。あるいは「聖霊を悲しませる」(エフェソス 4:30) 人とみなされてしまうのでしょうか。また、ある人の言うように「聖霊によって立てられている以上、言わばそれは、ダビデを迫害したサウルの場合と同様「神の油注がれた者」であり、正式にその立場からおろされたのではない限り、たとえ、不完全な者であってもその人を尊重しないなら、神の不興を買うことは避けられない」というのは本当でしょうか。このことを考量するにあたり、まずその論理の出所である聖句を引用しておきましょう。

「あなた方自身と群れのすべてに注意を払いなさい。神がご自身のみ子の血をもって買い取られた神の会衆を牧させるため、聖霊があなた方をその群れの中に監督として任命したのです。わたしが去った後に、圧制的なおおかみがあなた方の中に入って群れを優しく扱わないことを、わたしは知っています。そして、あなた方自身の中からも、弟子たちを引き離して自分につかせようとして曲がった事柄を言う者たちが起こるでしょう。「ですから、目ざめていなさい。そして、三年の間、わたしが夜も昼も、涙をもってひとりひとりを訓戒しつづけたことを覚えていなさい。…わたしはだれの銀も金も着衣も食ったことはありません。…わたしは、このように労苦して弱い者たちを援助しなければならないこと、また、主イエスご自身の言われた、『受けるより与えるほうが幸福である』との言葉を覚えておかなければならないことを、すべての点であなた方に示したのです」。—使徒 20:28 - 35 (新世界訳)

「使徒の活動」の書は、キリストの亡き後、(不完全な人間からなる)使徒、及び初期クリスチャンたちによる「会衆の設立」に伴う様々な取り決め、習慣、様式が確立してしていったプロセスを記録していったものですが、長老(年長者)を各会衆に置くことに関する記述は14章に記されています。
(使徒 14:23) …さらにまた、彼らのために会衆ごとに年長者たちを任命し、断食をして祈りをささげ、彼らをその信ずるエホバにゆだねた。

「ここで「任命し」と訳されている χειροτονέω (ギリ語:ケイロトネオー) という語は本来「手を挙げて委託の意思を表明する」(英:[stretch out the hands to commission]) という意味であり、この方式による選挙を意味したのですが、選出方法がどのような形式であったかに関わらず単に「選出」あるいは「任命」という意味で使用されているようです。
例えばコリント第二 8:19 にも、テトスの選出に関してこの同じ語句が使われています。

一世紀当時において、責任のある立場につく人を選び出す（任命）するのに明確な手法は確立されていなかったようです。当時は、その都度、その場合に応じて自由に異なった方法を使った事が聖書の記録から推察されます。
次の幾つかの例を比較して見て下さい。

■ マッテヤの選任 くじ引き方式（使徒 1：25，26）

■ 霊と知恵に満ちた確かな男子七人の選出（使徒 6：3－7）

「あなた方の中から、霊と知恵に満ちた確かな男子七人を自分たちで捜し出しなさい。わたしたちがその人たちを任命してこの必要な仕事に当たらせるためです。…それで彼らは、信仰と聖霊に満ちた人ステファノ、およびフィリポ、プロコロ、ニコル、テモン、パルメナ、またアンティオキアの改宗者ニコラオを選び出した。そして彼らを使徒たちの前に立たせると、使徒たちは祈ってから彼らの上に手を置いた。その結果、神の言葉は盛んになり、弟子の数はエルサレムにおいて大いに殖えつづけた。そして、非常に大勢の祭司たちがこの信仰に対して従順な態度を取るようになった。」

（この選出とその後の結果から、こうした方法に神の祝福が見られたことから、その時以来、こうした取り決めが確立されていったのでしょう）

■ パウロとバルナバの選任（使徒 13：1－3）

「さて、アンティオキアには、その会衆に預言者や教え手たちがいた。バルナバ…そ」してサウロであった。彼らがエホバに対する公の奉仕をし、また断食をしていると、聖霊がこう言った。「すべての人のうちバルナバとサウロをわたしのため、わたしが彼らを召して行なわせる業のために取り分けなさい」。そこで彼らは断食をして祈り、手をその上に置いてから二人を行かせた。」

（ここでは、聖霊そのものが選出を命じています。）

それで会衆における「責任ある立場」に置かれる人々の選任（任命）の方法は、明確に確立されてはおらず、その後の歴史はたちまち背教による、キリスト教暗黒時代に突入します。

さて、冒頭に引用した使徒20章28節以降の記述に戻りますが、パウロは聖霊によって任命されている人々に向かって、「自分自身に気をつけるように」諭しています。なぜなら、（このこともすでに「聖霊」はあらかじめパウロに啓示されていたようですが、）「任命された年長者たち」が、圧政的なおおかみと化すようになること、弟子たちを引き離して自分につかせようとして曲がった事柄を言う者となることが懸念されたからです。

実際、これはすでに 1 世紀当時から始まっています。

こうした警告が、パウロを通して彼らに伝えられたということは、言い換えれば、「聖霊」は、その任命された個人が「自分自身に注意を払う」ことを怠ったり、利己的になったりすることに関して、責任を持ってはいない、ということです。

事実、キリスト教の歴史を見れば誰でも分かるように、ほとんどの「聖霊によって任命された長老たち」は「圧政的なおおかみ」「曲がった事を言う者」となりました。そのようになったものについて、「聖霊による解任」がなされたという記述はありません。

それで、これは、クリスチャン会衆という取り決め、その制度の発足に関して、聖霊の導きの元に始められたことを示すものであるゆえに、「聖霊による任命」であり、その個人が「聖霊による是認」を得たという証拠になるようなものではないということが分かります。

実際、選任、任命（手を置く）は人間からなされました。

しかし、その職務や立場は、自分を任命した人間に対する責任感ではなく、神に対する責任であることを銘記させるために、そのように表現され、みなされたと言うことが分かります。

その立場にある者が、その責任の重大さ、思いの純粋さを保つべきゆえに、それは「聖霊による任命（命令）」とみなされますが、個々の、そうした立場にあるとされる人々（それがどんな組織や伝統の権威ある裏付けがあると言われていようとも）の言動は、当然の事ながらキリストのことは、その原則、聖書に記されたクリスチャン精神と調和していないなら、「神の聖霊」とは何ら関係ない、もしくは、聖霊を冒瀆する「聖霊に任命された長老」であり、考慮するにあたらぬことは言うまでもありません。

パウロは、長老としての模範として自分自身を示しています。その主な特質は、「受けるより与える方が幸福」と言う原則であり、これは文脈からいっても、全クリスチャンと言うより、監督職にある人に対するものであり、経済的に他の人を当てにしたり、ましてや当然のこととして制度化する根拠などはなく、誰であれ、どんな立場であれ、衣食住などはすべて自分で自分の必要をみたすべきであるというのが、ここでパウロが力説してしている要点です。

そのことの重要さを知って欲しいという彼の切なる思いはとりわけ次の言葉の中に集約されています。

「三年の間、わたしが夜も昼も、涙をもってひとりひとりを訓戒しつづけたことを覚えていなさい。」

本当の意味でパウロのこの思いを覚えている「年長者たち」がどこに、どれだけいるのでしょうか。